

いる。「治療教育学」は、心理的身体的偏りをもつあらゆる子どもを対象にして、人格全体の形成でなく、特別な感覚—運動訓練を教育の課題としてきた。著者は、一方で「治療教育学」の訓練の誤ちから、治療的要因の役割を過少評価し、「社会復帰教育学」等、対象の範囲を無制限に拡張する動向があることを批判し、医学的方法

と教育学的方法の結合を継承し、臨床的、心理学的、教育学的診断による厳密な知的遅滞の判断と教育が今要求されていると論じている。これは、日本の精神薄弱児教育史研究においても、求められている作業仮説と考えられる。(東京都立大学大学院 峰島 厚)

倉内史郎 神山順一 関口 義

『各種学校(専修学校)カリキュラムの研究』

(野間教育研究所紀要第29集)

講 談 社 刊

1977年8月発行 定価3,200円

従来、和・洋裁、簿記・珠算、自動車整備、調理・栄養、看護婦・保育養成、理・美容、予備校などの各種の教育施設は、学校教育法第一条に定められている小・中学校、高校、大学、高専、盲・聾・養護学校及び幼稚園(いわゆる一条校)と区別され、「各種学校」として一括されてきた。これら各種学校は、近年、学校数約八千、その生徒数は約120万人と四年制大学学生数に匹敵する程の地歩を占め、そのなかには、「職業若しくは實際生活に必要な能力を育成し、又は教養の向上を図ることを目的として内容的にも充実整備されたものが少なくない。そこで1975年の学校教育法の一部改正により、従来の各種学校のうち一定の条件を備えるものは「専修学校」として位置づけられることになった。

しかし、この各種学校(専修学校)に関する研究は、これまでのわが国の教育学界ではほとんど未開拓であった。倉内・神山・関口の3氏は数年前からこの分野の研究に着手したが、その成果の一部は本誌でも紹介されている(第40巻第2号参照)。

本書は、倉内氏が各種学校に関する研究をそのカリキュラムにまで押し広げ、その実態に関する広範かつ詳細な調査分析から、種々の特徴を解明したものである。

本書は、I調査編、II資料編に大別されている(ページ数からみて)。Iは、第1章研究の経過、第2章「各種学校カリキュラム調査」(アンケート)の結果、第3章カリキュラムタイプ分析、第4章各種学校カリキュラムの特徴、の4章からなる。

第1章では、各種学校のカリキュラムを分析するために、①設置主体、生徒数及び教員数、②代表的な課程と

その属性、③修業年限、年間授業時間数、週間授業日数、④在籍生徒の学歴、⑤教育目標、⑥カリキュラム構成の主な根拠、⑦この課程のカリキュラムの特色、⑧知識(学科)と実技(実習)の関係、⑨一般教養の目的、⑩カリキュラムの改訂、⑪カリキュラムの構成の制約条件、⑫現在のカリキュラムの問題点、⑬接続する上級の課程、⑭カリキュラム改訂の仕方、の諸項目が詳細に調査されている。これらデータから、①服装・家政系、②医療・衛生、教育、福祉系、③工業系、④商業実務系、⑤芸術・芸能系、⑥文化・教養系その他、の校種によるカリキュラムの一般的傾向が分析されている。

第3章は、以上のデータから析出された各種学校のカリキュラムの三つの類型のそれぞれに関するケーススタディである。単科専修型は、単一の科目または中心的な一つの科目の他にごく少数の科目をともなって構成されているタイプで、珠算、英会話、書道のような、単一の技能あるいは単一の種類の知識の習得を目的とする課程にみられ、「学習の性格としては<単能習熟型>ともいふべきもの」とされる。並列型は、「学ぶ内容が、多種類の知識あるいは知識と技能・技術にわたっている場合に、それらの知識や技能・技術に対応する教科が並列して構成されているカリキュラムで、「通常の学校教育のカリキュラムでもっともよくみられる型」であり、各種学校にも校種を問わず多く、「学習の性格は全体として<知識応用型>の傾向がある」とされる。一般的にこの型では「単科専修型の型にくらべると修業年限や授業時間が長い傾向がある」という。統合型とは、「特定の科目を中心に、他の科目がすべてその中心科目に関連づけ

られて構成されている」型で、中心科目の内容が他の関連科目で学ぶ知識や技能・技術を統合して成り立つもので、主に服装系や芸術系にみられ、「統合された能力を発揮してものを<つくる>仕方を学ぶ課程であって、学習の性格としては<製作（または制作）技術型>といえるであろう」とされている。

第4章では、以上の調査分析から、各種学校のカリキュラムの特徴として、「極度の多様性」、「理想型」がないこと、類型の違いによる重点のおき方に相違があること、それは一般教養科目の扱い方についてもいえるこ

と、ただし医療系の各種学校に代表される公的資格あるいは国家試験の受験資格の取得と制度的に結合している課程のみは、法規の規制を受けているのでカリキュラム編成の自由度が少ないこと、などが指摘されている。

Ⅱ資料編は、①各種学校（含、専修学校）教育課程例——31校、②資格取得のための各種養成施設（学校）カリキュラム関係法規——抜萃、③各種学校、専修学校に關係する法令、に分かれ、貴重な、また便利な資料を提供している。A5版、393頁。

（名古屋大学 佐々木 享）

研究情報

<女性問題研究会>

この研究会は、本誌第43巻4号<研究情報>欄(p.120)で紹介した宮城教育大学<女性論ゼミ同窓会らしきもの>が発展的に改組して新発足したものである。改組の直接の事情は、<……同窓会らしきもの>の母体であった宮城教育大学の女性論ゼミを担当してきた安川寿之輔が埼玉大学に転動したためである。新しい女性問題研究会（77年6月発足）は、埼玉大学とはひとまず関係なく、諸大学の大学院で女性論の視座をふまえた研究活動を志向している院生、地域の婦人運動の担い手、労働婦人、主婦、男性を問わず女性論に関心をもつ者、埼玉大学女性論（自主）ゼミ学生有志などによって組織されており、77年7月以来、月1回の研究例会を重ねている（於、埼玉県労働会館）。

まだ機関誌を刊行できるだけの研究の成果と蓄積をもつ迄には致っていないが、上記<研究情報>欄で紹介し

た<女性論ゼミ同窓会らしきもの>の機関誌第1～3巻『1974年現在』『1975年現在』『1976年現在』の刊行を、とりあえず休まずひきつごうということで、今回、女性問題研究会機関誌第4巻として、『1977年現在』（266頁、B5判）を刊行した。主な内容は、小野寺玲子「ボーヴォワールとカント」、安川悦子「イギリス『性差別禁止法』について——女性解放におけるその成果と問題点——」、池田 諒「ちいさな一つの証言——ある軍国少年の出発について——」、安川寿之輔「女性論入門——性差別の現状と解放の展望——上」、小特集<女性論古典学習ノート>、翻訳二篇その他である。なお、池田「ちいさな一つの証言」は天皇制軍国主義教育についての教育史研究上克明で貴重な証言となっている。

『1977年現在』の希望者には、1,000円で送ります（定価800円、送料200円）。ご批判、助言をお願いします。（安川寿之輔）